

Ⅳ 成果と課題

1 成果

仮説 1

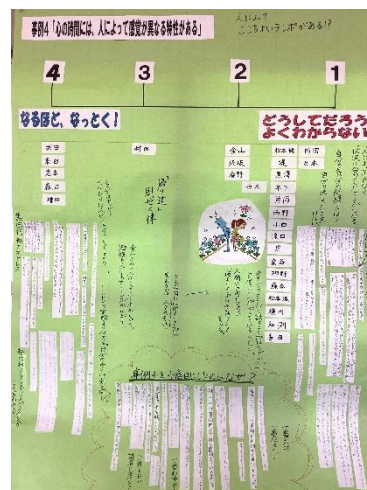
子ども自らが問いを追求し、子どもの思考に沿った授業を展開することで、自律的に学ぶ子どもが育つだろう。

子どもたちの「ふしぎだな」「調べたい」「みんなで考えたい」という思いを大切に、子どもにとって切実な学習問題を掲げ、互いの考えや思いを共有する授業を展開してきた。そうした学習に継続して取り組むことで、子どもたちが出す学習問題も焦点化され、一人一人のもつ問いの解決に結びつくものに近づいていった。自らの問いをもち、それを解決したりみんなで考えたりする楽しさを感じることができ、対話しながら互いの考えや意見を表現しようとする子どもが増えてきた。それをみんなが受け入れることで、誰もが安心して発言できる雰囲気になり、授業にも活気が出てきている。

また、「学習の歩み」を教室に掲示し、子どもたちがいつでも学習をふり返り、学習活動への見通しをもって取り組むことができるように工夫を重ねた。子どもたちは、予想以上に「学習の歩み」を見ており、子どもたちの目的意識や学習意欲を継続させるのに大いに効果があった。

子ども一人一人の考えや意思決定、前時のふり返りなどを記した座席表を用いて授業展開を構成することで、子どもの思考の流れを大切にした授業を展開できるようになってきた。

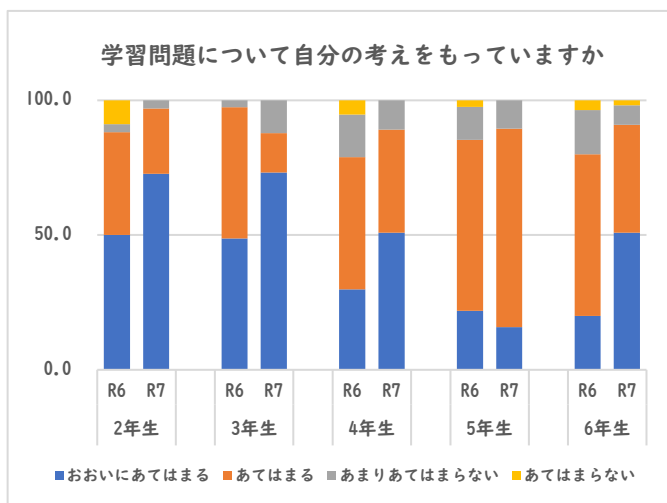
これらの取組によって、自分の考えをもち、自律的に学ぶ子どもが育ってきている。



仮説 2

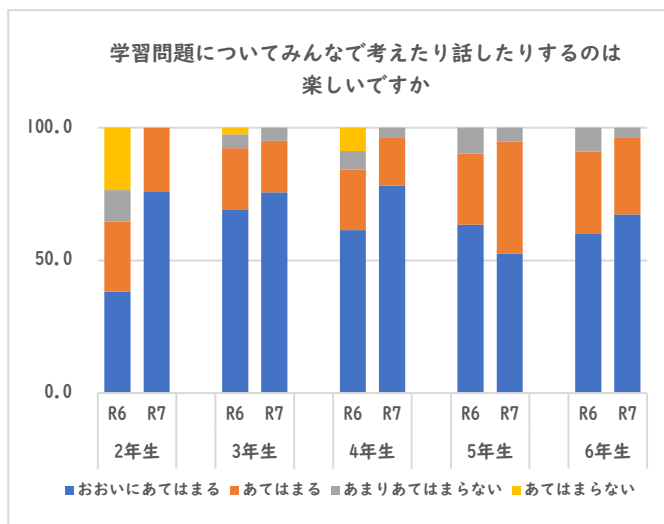
言語活動を充実させ、自らの思考を広げたり深めたりすることで、より主体的に問題解決に向かう子どもが育つだろう。

学習問題の解決に向けて、自らの考えをもち、互いの考えを伝え合い深める中で、自分の考えと比較したり、考えを広げ深めたりすることに重点を置いた授業展開してきた。子どもたちの中に、自分とちがう意見を受け入れ自分の考えを深めていこうとする意識が高まってきている。4月に実施された「全国学力・学習状況調査」では、「自分とちがう意見について考えるのは楽しいと思いますか」という設問に対して肯定的な回答が96.7%あり、全国平均を18ポイント上回っている。



また、そのことについては、本校実施の「国語アンケート」の結果にも表れている。授業では子どもが主体となり、子どもたちが自分の問いを意識しながら授業を創りあげられるよう、授業における教員の関わり方についても考えながら取り組んできた。

また、子ども一人一人が思考したり、判断したりできるよう授業の中でタブレットを効果的に活用した。文字を書くことや、漢字の定着が難しい子にとっては、文章を書くハードルが低くなり、かなり有効であった。子どもたちが自分の考えをタブレットに記し、それを友達と共有することを通して問題解決に向かうことができた。考えを出し伝え合うことで、自分の考えを広げたり深めたりできる子どもの姿がみられるようになってきた。



仮説 3

言語環境、読書生活、言語による表現活動の充実等を図ることで、豊かな言語能力をもつ子どもが育つだろう。

子どもたちの語彙を豊かにするために、教室や廊下、児童玄関の掲示を充実させた。子どもたちの目に触れやすい所に作品や季節の言葉や様子を表すものを掲示し、子どもが日常的に言葉にふれ親しむことができるよう環境を整備してきた。また、作品や掲示物を学年の枠を越えて閲覧し、感想や意見を互いに伝え合うことができるような機会も設けた。



読書活動では、図書室の環境整備や図書委員会の活動、また子どもたちが読書に親しむことができるような活動に取り組んできた。「朝のおはなし会」や読み聞かせボランティアによる「お昼のおはなし会」等、関係機関と連携し読み聞かせの機会を充実させ、子どもたちが読書を楽しみ、じっくりと味わう時間を作った。また、子どもたちが自分の紹介したい本についてポップや帯をつくり、読書を促す発信もした。

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果から、本校の子どもたちの読書に対する意識の高まりを感じられた。「読書は好きですか」の設問に対して、肯定的な回答が82.2%になっており、全国平均を13ポイント上回る結果となっている。

さらに、異学年による国語集会「レッツ！平小タイム」を行い、言葉集めや連詩づくり等、「言葉の力」を高める活動に取り組んできた。活動を通して、子どもたちの語彙も豊かになり言語能力も高まってきていることを感じる。言葉で表現することの楽しさや、伝え合い表現することの喜びを感じることができている。